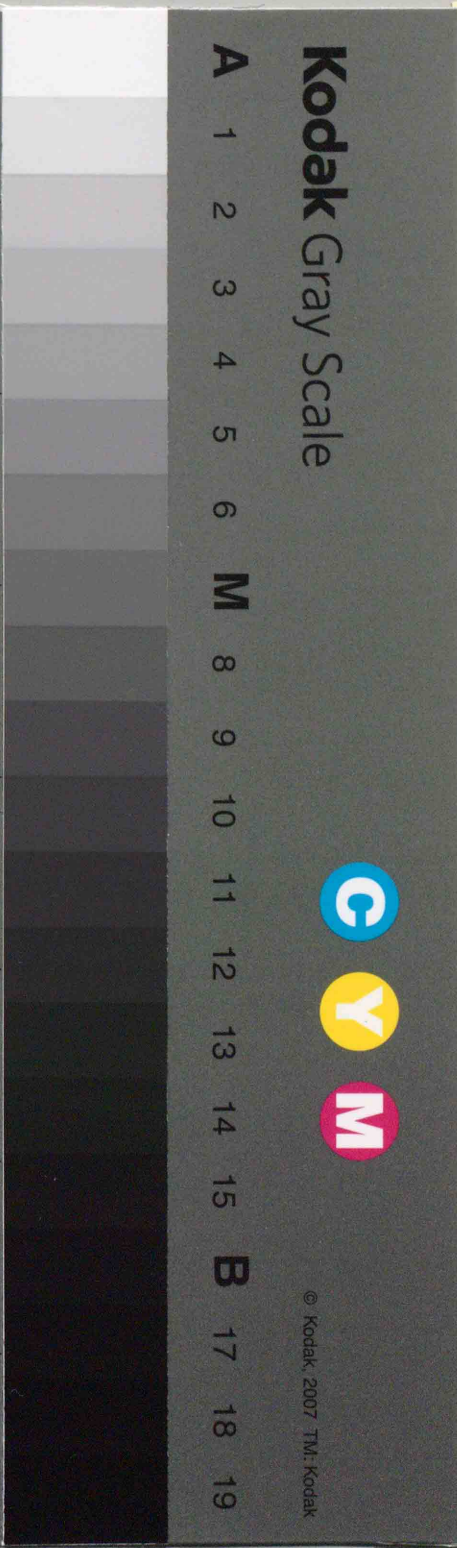
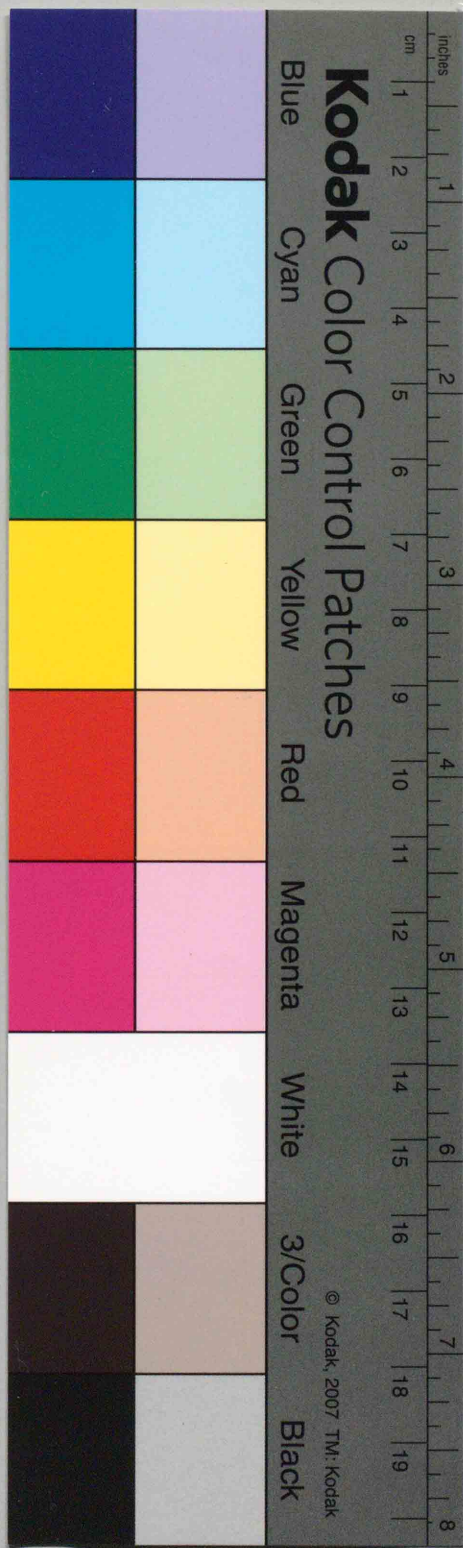


375.9
Y619
資料室

新編
小學修身書

吉田賢輔編
尋常科用

四



30545

教科書文庫

3
110
31-1886
20003 02854



375.9
Yoi9

室
料
資
大
書
中
大
學
新
編

吉田賢輔

編



卷四

新編 小學脩身書

東京

汎愛堂藏梓



新編 小學脩身書卷四

- 第十八 廉耻の無味を戒むる事
- 事實の心算を習ふ事
- 泰時人の贈り物をつくなむ返したる話
- コルバアト、賣り物の代を多く取り
- 持ち行きて、戻したる話
- 揚震人の謝金を受けざりし話

新編小學

脩身書卷四目錄

二〇

附格言

第十九 慎重

事實

- 文藏算盤を借りて、百を二つに割る話
- ワシントンの字を習ひたる、草紙に、書きかけなどの、無かりといふ話
- 庄衛門、人より、借りたる物を、手帳へ記し置く話、朱四

- ジヨンスウリ、主人の言ひ付けを、守りて、一人博覽會へ、赴きたる話
- 孔光、宮中の事を、妻子等に、語り聞かせざりし話、愛國

附格言

第二十 節制

- 事實の如きもの、如きもの、
- 如水、ある人に、貸したる金を、受け取らざりし話、の如きもの、

○ガヨット土地の爲に、水桶を造らんと
いふ話

○惠齋、一の些の字を守りて、長壽を保
ちゝ話

附格言

第二十一 愛國

事實

○ハンウエー水軍義兵の社を、取り立て
て、國を守りたる話

○ジョアン、敵兵を討ち退けて、國を全
うゝたる話

○藺相如、國の爲に、廉頗の怒りを避け
たる話

附格言

第二十二 慈育

事實

○アレインエフェルの母、衣食を減トて、
子の學藝にかけたる話

○孟軻の母住所をかへ、又機を斷ちて、
 ○軻の學問を成さしめたる話、
 ○ナポレオンの母、行を正しくして、子を
 訓へ、育てし話、

附格言

新編 小學修身書卷四目錄終

新編 小學修身書卷四

吉田賢輔 編

第十八 廉耻

古人の言に、己の心を潔うして、非理
 を思はず、行を正しくして、非義に動か
 ず、たとひ、我が身、困窮に陥るも、道に
 そむく財は、貪ることなし、之を廉耻
 の人といふなり、

持

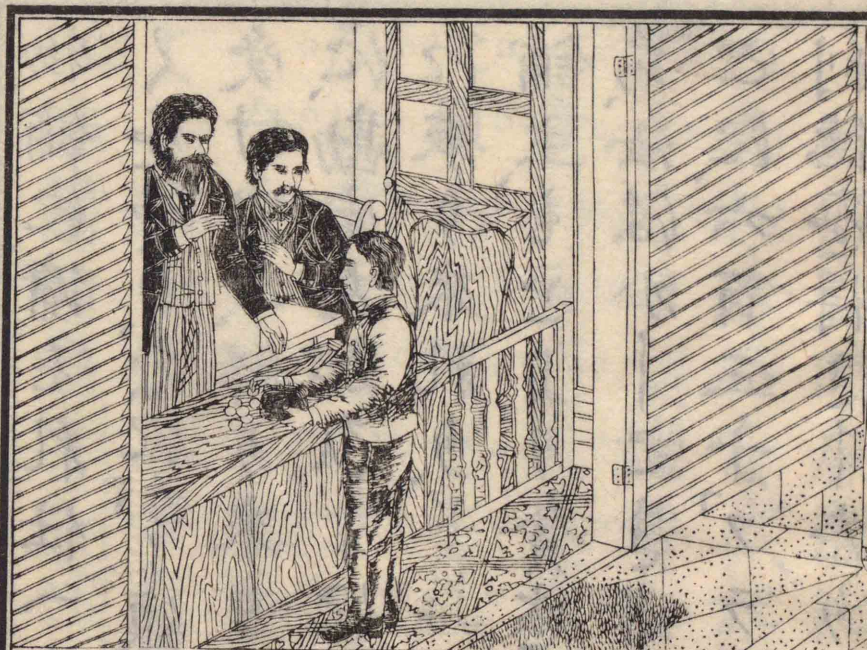
泰時人の贈り物と、つくをい返したる話

○北條泰時、廉潔にして、自ら守り、將士の奇物、珍品など、たくる者あれば、悦びず。て曰く、諸君のたくる處、あたひ應に貴かるべし、是我に益なくして、諸君に損あり、何ぞうれの故を以て、たがひに、身をけがすべけんやと、ことごとく金を出して、之をつぐなひ返せり、是より賄を行ふ者なく、古田買神

佛蘭西のコルバアト、幼き時ある織

コルバアト、賣り物の代を多く取りしと持ち行きて、戻したる話

物舗に傭えれ仕へり、一日、織物そこをくを賣り、なにがし銀行より、其あたひを受けとり、歸り來りて、ふた、び算ふるに、勘定たがひしにや、多分の金を餘分に取り來れり、
舗主もとより、貪慾ゆゑ、大に喜びて、あ、汝はかゝこまき者なり、今織物一卷ごと、に、六百三十フランク、凡そ我が百貳拾六の圓ホドニ當ルの、利徳を得さしたりと、其金そこばくを、



分け與へんと志たり、
コルバアート曰く、
兎忽にして、人の金を
を、餘分に取り歸れ
り、今行いて、其罪を
己び、且之を戻し來
なん、主君何ぞ此不
義の利を、利となし

て用ひんや、請ふ少く、ひまを給へと、
銀行へ到りて、之を返せしかは、舗主い
かりて、コルバアトを逐ひ出せり、
銀行にては、其心の潔うして、すこしも、
慾に汚れざるを感ト、コルバアトを入
れて、事務をつかさどらしめたり、後次
第に名あらわれ、佛國の王ルイ、十六
世の時、會計事務大臣になりたりとい
ふ、

御金
ヤ
御
御
御

新編小説 作身書卷四

揚震人の謝金を受けざり

○後漢の揚震といふ人、東萊の太守となりて、任所に赴く時、昌邑といふ所にかゝりしに、其地の令、王密は、震のすゝめ、舉げし人ゆゑ、夜半ひそかに、黄金八鎰を懐に入れ來りて、震に托くれり、震之を却けて、受けざれば、密曰く、夜半、外に知る者なき、請ふ之を納めよ、震曰く、他人知らざるも、天知り、地知り、吾と子と亦知るにあらずやと、遂に受けざり

とぞ

格言

○廉士は、財を愛せざるにあらず、之を取ること、道による、古語
○獨立ちて、影にはぢらず、獨いねて、魂にはぢび、晏子春秋

第十九 慎重

薛文清曰く、たよそ何事をなすにも、かるくゆるかせにすべから

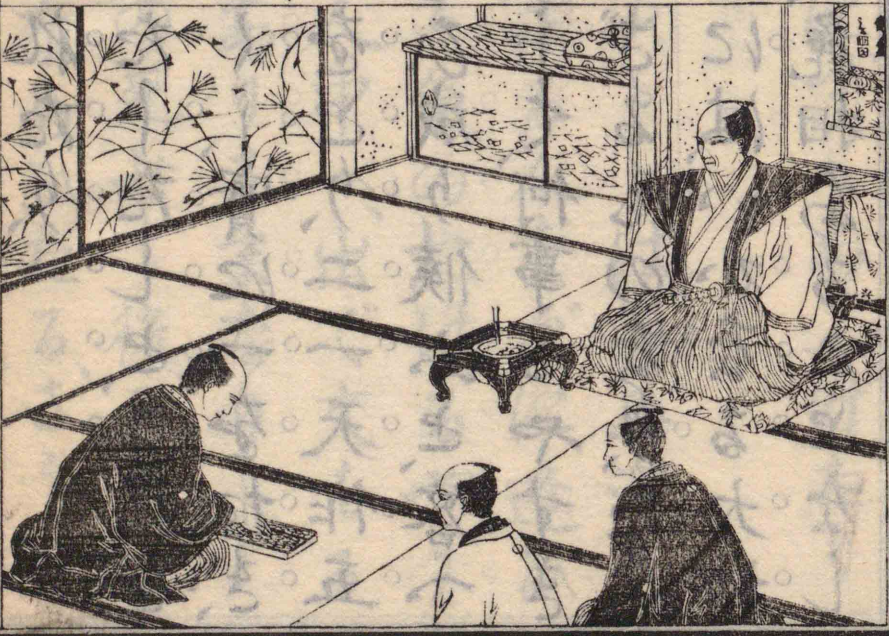
文藏算盤
を借りて、
百と二つ
小割る話

べいたりて、小なる事といへども、
なまさに慎み重んずべし、

事實

○野田文藏といへる人は、算術の名人
なりしが、つねに慎み深くして、何事も
軽くし、くし、ことなす、大岡忠相の町
奉行たりしとき、文藏を勘定役に、ひま
上げんと、の評議ありて、忠相これをこ
ころみんと、文藏をよびよせて、其許は、

算術に達せるよし、
今我がのぞみの割
りものを、すぐいた
し見られよとあり
ければ、文藏ころ
に、いかなる入り組
みたるものにやと、
思ひおたるとき、百
を二つに割れば、何



新編、算術、各才書、長白

ほ。ど。な。る。ぞ。と。問。え。れ。た。り。
文。藏。算。盤。を。拜。借。い。た。し。と。こ。れ。を。
借。り。て。か。た。ち。を。正。く。し。實。に。一。を。お。ま。き。
法。に。二。を。お。ま。き。て。位。を。と。り。二。一。天。作。五。
と。割。り。て。五。十。に。あ。ひ。成。り。候。ふ。と。答。へ。
け。れ。ば。忠。相。大。に。感。ず。て。何。事。も。や。す。ま。き。
と。て。輕。く。し。く。は。せ。ざ。る。も。の。な。り。た。ら。ん。
今。の。い。か。た。な。ら。ん。に。は。い。か。な。る。大。切。
の。役。義。も。け。つ。し。て。麁。相。あ。る。こ。と。な。し。

ワシントン
の字を
習ひたる
草紙に書
さかけな
どの無か
りとい
ふ話

とつひに勘定上役にすゝめ上げたり
とぞ、

○亞米利加のワシントンは、慎み深き
人にて、いまだ知らざる人などに逢ひ
たるときは、何となく、氣のたけるやう
す。あり、又あまたの人中へ、出で交わる
などは、一向なれぬありさまなり、
ある人、ワシントンの死せし後、その十
歳前後のとき、字をならひたる、さう紙

庄工門人
より借り
たる物せ
手帳一記
置く話

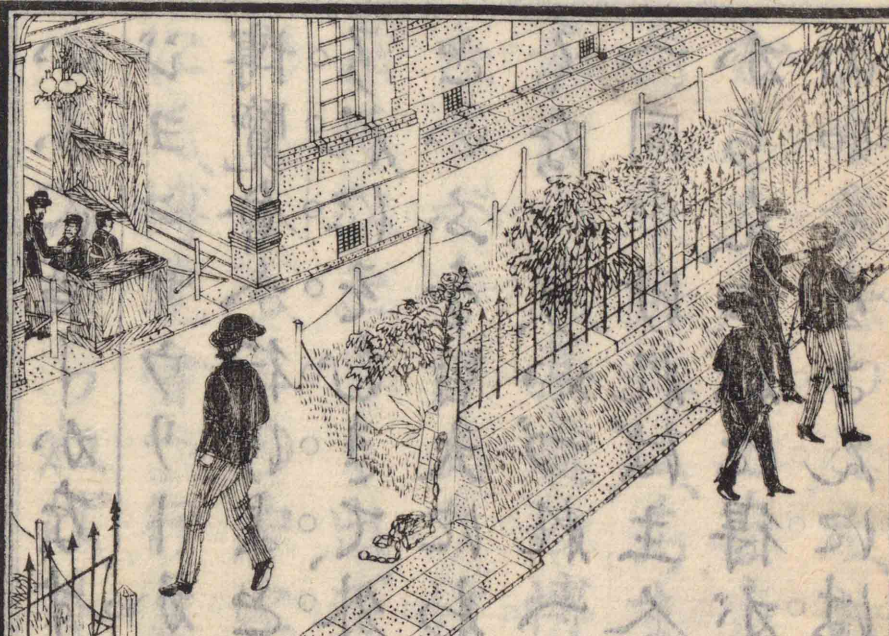
の箱のそこに入れありくを見いだす
しに一字一字づいみ正くならひあ
りて書きかけ又は消くものたねて
なかりといふ
○徳川家麾下に杉本庄右衛門といつ
る人あり人より書籍など借りること
あれば一く手帳へ志るてこれをろ
の妻に示すたきたり
ある人ろの甚わづらはしきを笑ひし

ジョンサ
ウリ、主
人の言ひ
付け守
りて一人
博覧會へ
赴きたる
話

に庄右衛門こたへていな人の命は計
られぬものなり固より返さぬこゝろ
はあらざるも我もくに死した
らんには妻これを分け返すことあた
えざるべしかくてはろの人へ信義
をかくにあらずやといひしとぞ
○亞米利加にジョンサウリといつ
る人あり十八九歳のときある商家に
やとえれしが生れつき慎ふかくして

よく業をつとめ、主人のいひ付けに、
むきたることな、
ある日、主人は、あまたの雇人に、ひまを
あたへて、某處の博覽會へ行きて、見ま
たるべしとありけり、雇人等は、よろこ
びて、ひとしく出で行くとき、ジョンサ
ウリーも、この中にありしが、一人みち
にて、博覽會へ行きたりして、さのみ、た
も、ろからぬば、外へ行きて、あそばさんと

いふに、皆しかなすべしと、同意したり、
ジョンサウリーか、しをふりて、主人
博覽會へ行けよと、ひまを給ひたるを、
それこそむきて、外へ行くと、やある
といふを、皆大にわらひて、汝は、甚かた
くな、り、いづれへ行くも、かへる時さ
へ、同しければ、主人これを、知るよしな
からん、つねに得がたき、ひまを得て、汝
の如く、なさんには、何のたのしみかあ



るべき汝一人行か
ば行け我等は共に
せざるなりといふ
に、
ジヨンサウリ
からんにはせひも
な、我は主人のい
ひ付けに、うむきが
た、ま、て、主人の

知らざるとして、これをあざむくべけん
やと、つひに博覽會へ杞もむきて、日の
暮る頃かへりたるに、外の者もまた
かへり来て、みな博覽會へ行きたる如
くに、いひたり、ま、
ジヨンサウリは、他人の、惡事をあら
はすを、好まねば、主人のくはしく、たづ
ねざるを、幸と思ひおたり、
人この事を知りて、ますしく、ジヨンサ

孔光宮中の事と、妻子等に語り聞かせざりし語

ウリトを信用し、後家産そこばくを分けあたへて、大にジヨンサウリーの富をなさいめしといふ。
○漢に、孔光といへる人あり、宮中にいで仕へしとき、志ばしいとまを賜りて、古郷へかへり、兄弟妻子等に安ひて、互にかはりなきを悦び、志たしく四方のはなすなどしけるも、すべて、宮中のことより、我が仕ふる、役義のことまで、た

とひかりをめの事なりともはなすまかせざりし、ある人、温室省の中に、うゑある樹は、何の木ぞやと問ひしに、一向まかざるふりにて、更に外のはなすをうたりとい



ふ

格言

○知者は言行を慎みて、身の安全をな
し、賈誼

○みづから重んぜざる者は、辱をとり、
みづから恐れざる者は、禍を招く、
後漢書

第二十一 節制

室鳩巢の曰く、人は貴きと、賤きのと
かちなく、住居衣服、遊山などのたご



りをたぶまき、日く用ふる、ついえをへ
らして、不時の用に貯へたまき、世のた
め、又は親屬、朋友などの、己ざをひに
かゝりたる時、力をそふるを、肯とを
べし、
まとい、身の安からんことを思ひ
て、飲食など、分にまぐべからず、

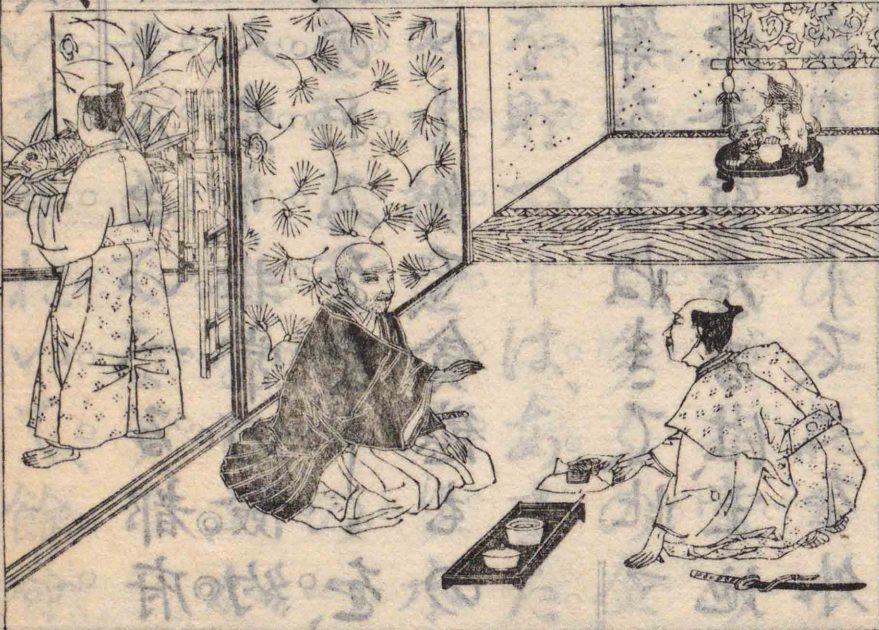
事實

○ある人、朝鮮の軍に、軍用の乏しとて、

如水ある
人に貸し
たる金を
受け取り
ざりし話

黒田如水に、金五十兩借り、歸陣の後、返
金せんと、黒田のやゝきへ、行きけるに、
をりから、到來せりと、鯛一枚を、家來の
もの、持ちいで、披露したり、如水見て、
よろしく、三枚におろし、身は鹽にして、
貯へたまき、骨のある所をば、この客にも、
我らにも、食をせよと、いひければ、ある
人心に、さても吝嗇なることかなと、賤
みねもひ、かの五十兩を出だし、あつく

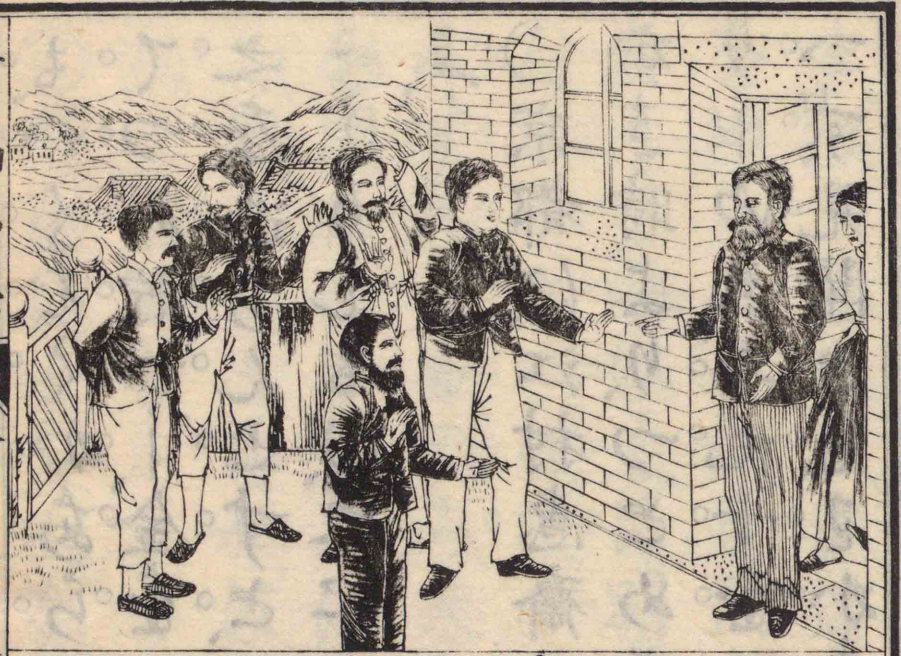
禮をのべて、返しけ
るを、如水見向もせ
ずして、ろれは、我初
より、進上せしつも
りなり、軍用に立ち
しうへは、ついに
あらず、金銀の徳、我
に於ても、満足せり
と、固くことわりて、



ガヨットの土地の為に水樋を造らんといふ話

新編小治政 俗書考

受けざりとなり、
 佛蘭西のマルセールといへる都府
 にガヨットといふ老人あり、非常の儉約
 をもつて、遂に數萬のともみをなすを、
 土地のものあひのりて、貪慾もの
 といひあへり、
 ある日カヨット其人等をまねきて、此マ
 ルセールの民の常に貧窮なるは土地
 の水の飲み料にかたをすして之を外



より、買ひ入れるゆ
 急なり、我が非常の
 儉約もて、多くの金
 を貯つは、あまた
 の水樋をつくり、水
 を引きて、人々のつ
 いやす金をたぶか
 せんとしてなり、
 いま年たいて、餘命

新編小治政 俗書考

も、い。く。む。く。か。あ。ら。じ。と。お。も。へ。ば。か。ぬ。
て。つ。み。貯。へ。し。金。を。も。て。人。く。の。た。め。に。
之。を。造。ら。ん。と。す。と。つ。げ。れ。ば。常。に。の。
ふ。り。し。も。の。大。に。を。ぢ。服。し。た。り。と。い。

惠齋の
些の字を
守りて長
壽を保ち
一話

○京都に、江村惠齋といへる人あり、
かき時より、つとめて、身の養生をいた
り、ゆゑ、年九十をこえて、なをたどる
へず、見聞とも、己かき時に、かえらざり

き、後水尾天皇、まことめし給ひて、惠齋
をめされ、其法を問え給ひしに、惠齋
奏して、いはく、臣別に法あるにあらず、
たゞ平生一の些の字を心にをさめて、
己すれざるのみ、天皇かさねて、其ゆゑ
を問をせ給ひ、次に、飲食などを些に
て、飽くことをせは、と奏したりとぞ、

○用を節して、人を愛す、論語

○人情りて、侈れば貪、力めて、儉なれば富む、管子、金をもて、人のために、
○侈は、長ずべからば、欲は、ほしくまゝに、なすべからず、禮記、食を、
○第二十一、愛國、
○西哲、いへるあり、人其國に生れ、安居、
○素、て、吾が業をなすは、國家の賜ものなり、
○故に勉めて、國家のためには、我がた

ハンウェー
水軍義兵
の社を取
り立て、
國を守り
たる話

○英吉利に、ジヨナス、ハンウェーといふ
る人あり、十七歳のとき、ある商店に、や
とたれ仕へ、が、その言ふこと、偽なく
て、爲事、こと、必ず、遂げ、かば、おほく
の人に信用され、つひに、ラッシャ、商會、こ
れを勧めて、その社へ入ら、めたり、後

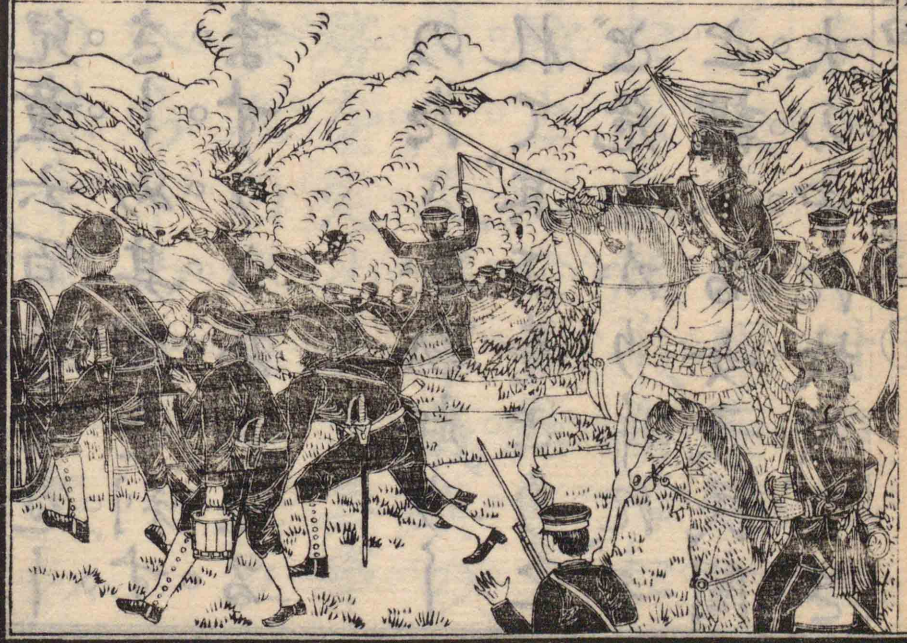
佛蘭西の兵、英吉利をか討つての説ありければ、ハンウエに大に海軍を備へて、これを防がんと、ねもひ起し、商人たよび船主等を大會館といつる館へよびあつめ、評議をつくり、水軍義兵の會社をとり立て、職務を定め、自ら其事をすべく、一萬餘人の水軍を仕立て、これを海軍へ入らしめたり、以て、英吉利水軍會社のは、よめにして、

ジヨアン 敵兵を討ち退けて、國を全うしたる話

後、年々、貧しき家の兒童、六百人を養ひて、水夫となさしめ、其國を利すること、今に至りて、ます、あらざる、といふ、

○佛蘭西と、英吉利のた、かひ起りし時、佛蘭西は、大に敗れて、其王をとりこにせられ、國ほとんど危ふかりに、ヂヨアン、オスアークと謂へる女子、民間より起り、國人を水火の中に救ひ、

新編小治政 卷四
 は。ひ。を。除。か。ん。と。た。
 も。ひ。立。ち。直。ち。に。王。
 の。子。チ。ヤ。ー。レ。ス。の。
 前。に。い。た。り。一。軍。を。
 得。て。敵。兵。を。く。く。か。
 ん。こ。と。を。請。ひ。し。に。
 チ。ヤ。ー。レ。ス。之。を。許。
 せ。り。佛。軍。の。一。將。と。な。



是に於て、チヨアンは身にきらびやかなる、鎧を着け、白き馬に打ちのり、軍前に立ちて、兵を進退するに神の如く、ただ一戦に、英吉利の大軍を打ち破り、遂にこれを逐ひ退けて、佛蘭西の國を完ふしたり。

賤き一女子の身に於て、斯る大功をとげしもの、その國を愛するの精神に出でしものにて、感ずるに餘りあること

蘭相如國の為に廉頗の怒りと避けたる話

といふべし、
◎戦國の時、趙の國に、廉頗、蘭相如の二人あり、頗は、將軍にて、軍功多かりし、志かるに、相如、秦の國に、使して、大功を立てしにより、俄に、抜き上げられて、位、頗の上に出でたり、
頗大に怒りて、曰く、我が軍功、あげて算ふべからず、志かるに、相如、小身よりい、で、我が上に位するは、何ぞや、我彼に

あひなば、かならず、之をはづかすめん
と、
相如き、て、これをさけ、隠れおしを、ある人、相如に、斯ては、勇なきに似たり、といひしに、相如曰く、我先に、秦に、使して、秦王を、叱り、恐れさせたり、何ぞ一人の廉將軍を、恐れんや、今、秦の、趙を、攻めざるものは、我と、廉將軍の、あれを、なりも、し、兩人た、かは、共に、全きこと、能む

ざるべし、志かる時は、趙國隨て危からん。我が彼をさくるものは、私をまて、國をたもふゆゑなりと、頗これに聞きて、大に耻ぢ、相如の家に到りて、罪を乞ひ、兩人無二の友となり、力をあはせて、事を計り、かば、趙國のよき、堅固になり、といふ、
格言

己を後にして、國家を先にす、方正學

○人民の利益を増し、邦國の幸福を大にす、スミイルス 斯邁爾斯

○國恩を荷ふもの、當に忠義をもつて、國に報ゆべし、岳飛

第二十二 慈育

室鳩巢曰く、親の子を愛するは、學藝を教へて、才徳を成さしむるを、本とばかり、そのめ、の、勞苦をいたはりて、氣ま、に、育つることなかるべし、

アレシエフルの母衣食を減して、子の學藝にかけたる話

又曰く、家をねこすも、子なり、家をやぶるも、子なり、子に學藝を教へずして、子の繁榮をもとむるは、足なくして、歩まんとするに同ず、故に親たるものは、明け暮れ、之を日すれずして、子を教ふるを第一となすべし、
和蘭の畫師、アレシエフルの母は、家もとより富めるにあらざれば、我が

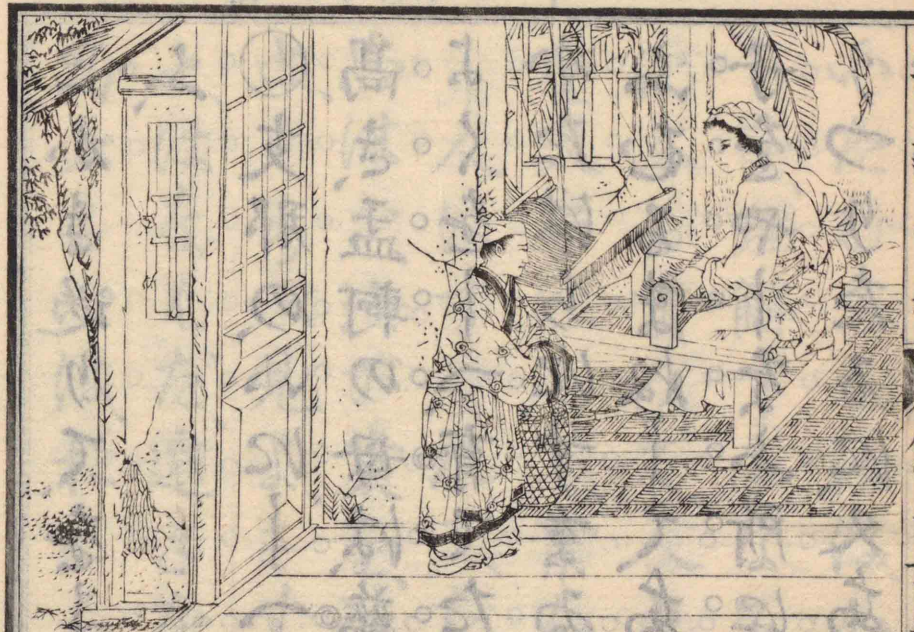
衣るもの、食するものをへらして、アレシエフルにかけ、其藝業をとげさせたり、アレシエフルの他にありて、修行しけるとま、母より文を送りて曰く、我此文を書くに、まづ汝の畫すがとを、取り出し、それに向ひて、汝の名を呼び、なみだを浮べ、まのあたり、告ぐる心に、て書けり、つよき言葉を、用ひて、汝を、されを時に、つよき言葉を、用ひて、汝を

いたむるも、汝はかならず母が心のう
ちを、理解するなるべし、汝常にうちば
にふるまひて、人と争ふことなかれ、身
を大事にすて、業をえげみつとめよ、も
し人にすぐれて、たくみならんことを
思はば、汝が業を、神の造りし、萬のもの
とくらべ見よ、さすれば、其及ばざるこ
と、はなえだ、遠まを知りて、汝のたごり
高ぶる心は、たこらざるべし、志かどく

孟軻の母
住所をか
へ、又機を
断ちて軻
の學問を
成さしめ
たる話

と、かき送りて、をいへ、いまいとい
ふ、

○支那のいにしへより、賢人のまことえ
高き、孟軻の母は、慈愛ふかくして、軻を
よくをいへ、育てたり、軻の幼き時、寺の
かたはらに、すまおけるに、軻は人を不
ふむるまねして、あそびけるゆゑ、母は
子をやしなふ所にあらずと、市の中へ
うつりたるに、又あまなひのまねをい



けるゆゑ母大にさ
とりて此たびは學
校の傍へ移りたる
に、軒はよみかき禮
儀などの真似て、
遊ぶに母はよろこ
びて、これ我が子を
育つる所なりと永
く住居しけり。

軒成長の後他國へ學問の修行に出て、
いまだ成らざるにかへり來りしかは、
母はまたをたりてゐたるが軒を見て、
きれものを取り織かけ、機絲をなか
ばより切りまてたり、
軒たろれおどろきて、何ゆゑさやうに
なし給ふと問へば、母は汝の學問をや
めて、歸り來るは、な不我がこの機を織
りををらすうて、半よりたつがごとし、

とひけるに、軻大にさとり、罪を乞ひて、ふたゝび修行に出で、つひに賢人となるに至れり。

ナポレオンの母行を正しくて子を訓へ育てる話

○佛蘭西第一世ナポレオンの母は、身のたこなひ正しくして、子を慈み育てたり。ナポレオン幼くして、たましく母のをいへる時は、これをいまいめさとすに決いてあらだて、叱ることなく、ぬんご

ろに、其心得ちがひをとまき、かせ、心よりたろれ入らゝめて、後やみぬ。ナポレオン、後に人にむかひて、我が斯くまで、身を高き所にのぶしたるは、皆母が慈育のたまものにて、我がろざしをかよく、事にたへみづから治むるに至らゝめたるなりと語りゝとる。

格言

○子の賢なるは、母の賢なるに資る、伊

藤長胤

○父母其子を愛して、教へざるは、父母のあやまちなり、司馬溫公

○父母其子を愛して、教へざるは、父母のあやまちなり、司馬溫公

新編 小學修身書卷四終

菱江淨書

修身書

明治十九年七月十五日版權免許
同 十月 出版

東京府士族

編者 吉田賢輔

下谷區下谷竹町
十番地

東京府平民

出版人 阪上半七

日本橋區本石町
十軒店六番地



定價金八錢五厘

